



1、知られていない乳児のサインと表現

(1) ベビー・サイン

赤ちゃんは何回もおむつを替える。その度に泣いて教えてくれるが、本当に泣くことしか伝え方はないのだろうか。そこで、おむつを替える度に「足上げて」と言ってからおしりを押し上げるようにすると、足が上がる格好となりその体制でおむつを替える。

するといつ頃からか、排泄感があると自分から腹筋を使って足を上げてくれるようになり、親子のベビー・サインになっていった。

(2) 3か月の赤ちゃんとおしゃべり

赤ちゃんの喃語に対して、かかわる大人がうなずいたり話しかけたりすると、赤ちゃんは対話を楽しんだり、遊びとして楽しんだりするようになる。

私達はどうして赤ちゃんはかわいいと思ってしまうのか。かわいいと赤ちゃんに思わされているような、実は赤ちゃんに大人がうまく世話をしたいと思わせる能力があると考えられる。

(3) 9か月の赤ちゃんとイタリアの赤ちゃん

「はらぺこあおむし」の絵本を4か月の頃から読んでいる赤ちゃんが9か月頃にとった姿。

①大きな月より小さな卵

絵本を最後まで読んだ後、もう一度読んでほしいようにせがんでいるような姿が見られた。そのために2度目絵本を「はらぺこあおむし」と言いながらページをめくる。最初のページは大きなお月様が出ている夜のシーン。その時に『んーんー』と言いながら指を指したのは、葉っぱの上に小さくついている卵。まるで、これがあおむしになる

と言わんばかり。虫の生態を理解しているのだろうか。

②夜泣きを止めた絵本

9か月の頃毎晩夜泣きをしていた赤ちゃん。お母さんから「大丈夫よ」と声を聴くと安心して寝るという姿が見られた。そこで、夜中に泣いて起きた時にそっと声を出さずにはらぺこあおむしの絵本を開いて見せた。すると、絵本が終わったとたん安心して眠りについた。これは絵を見ることでいつも読み聞かしをしてもらっているお母さんの声を思い出して安心したのではないか。

③イタリアのレッジョ・エミリア州で行われている幼児教育実践 10か月の赤ちゃん

4つのシーンで紹介した時計の写真。

1つ目は時計のカタログ雑誌を見ている赤ちゃん。保育者はそばにぴったりと寄り添っていて、赤ちゃんともまるで会話をしているようにみえる。赤ちゃんは時計の写真に指を指しながら「自分の時計」について保育者に何か訴えかけている様子。

2つ目のシーンは保育者が自分のつけている本物の時計を赤ちゃんに見せている。赤ちゃんは「先生の時計」を触りながら探索している。

3つ目のシーンは保育者が「先生の時計」を赤ちゃんの耳に当てている写真。赤ちゃんは目を大きく見開いて何かを考えているかのように見える。

4つ目のシーンは、カタログ雑誌に赤ちゃんが耳をつけているシーン。「先生の時計」みたいに「私の時計」からも音がなっているのか確かめる様子。

1のまとめ 「見る」から「見える」へ

赤ちゃんはすでに多くの可能性を持っている。その子どもに大人がしっかりと耳を傾けることが「みる」から「みえる」に変わっていくことになる。「表面的な理解」から、「内面的な理解」へと深めていくことが、育児でもでも大切。

2、乳児をもつ保護者の支え方を脳科学で考える

(1) ネグレクト（育児放棄）と産後クライシス

女性ホルモンのひとつ「エストロゲン」は胎児を育む働きを持つ。妊娠から出産にかけて分泌量が増え、出産を境に急減。脳では神経細胞の働き方が変化し不安や孤独を感じやすくなる。(不安になるのはママの性格ではない。)

母親の体内で分泌されるホルモン「オキシトシン」が密接に関わっていることがわかってきた。「攻撃性」として夫に向かうことがある。(夫婦仲が悪くなったわけではない。)

(2) 望まれる支え方—祖父母・保育者に支えてほしい

オキシトシンを「攻撃性」ではなく「愛情」を強める方向に働かせる。大事なポイントは、育児で常にストレスを抱えがちな母親の状況に、“寄り添い”の気持ちを示すこと。男性も積極的に育児に関わると脳に変化が起きる。

3、子どものワガママとのかかわりかた

子どもの脳では、「前頭前野」と呼ばれる脳の表層部分の働きがまだ発達しておらず、湧き上がる欲求や衝動を抑える「抑制機能」が働かない。「我慢する理由」を子どもが理解して、自ら進んで我慢する時に、前頭前野の抑制機能が活発に働く。

「抑制機能」とは、単に我慢する機能ではなく、何か目標を立て、その実現に向けて計画的に行動するための脳機能。周囲の大人が「ダメ！」と怒っても抑制機能は働かない。自分で納得した目的のために、自ら我慢をする経験が、子どもの前頭前野を働かせ、抑制機能を育てていく。

4、自信の獲得としつけについて

(1) しつけの言葉の意味

しつけとは、仕付け糸が語源となっている。着物の襟やスーツの襟などに仕付け糸がついている。それは繰り返し、繰り返し同じパターンでつけられていることから、昨日も今日も明日も明後日も同じ態度で子どもにかかわり続けることを意味する。仕付け糸はつけたまま服を着用しない。必ず糸を抜いて着用する。その時の襟はしっかりと形が整っている。それを自立の姿と呼ぶ。子どもが自ら自立するように、同じ態度で接することを大切に育児をおこなしてほしい。

(2) 具体的な子どもと大人のエピソード

「北海道の話」や「ピーピー豆」と「月のウサギの話」から教育の難しさについて考え、「3つの絵を描いてみよう」や「リンゴの絵」等、子どもの絵について話をするすることで、大人概念について説明した。

5、子どもは自ら育とうとする

乳児期の頃は、大人が驚かされるような成長と理解力がある。子どもの遊ぶ画像にもあったように、遊ぶ中で子どもの感動する心が育っていることがわかる。つい大人が子どものかわりにイライラしていたのは、出産後のホルモンバランスの変化や、子どもの脳の発達の未熟さのためであり、親の期待する子どもの姿と子どもの本来の発達の姿に「ズレ」があることがわかってきた。

子どもの好きなことをしている姿は、すべて遊びである。遊びの中には子どもの心を動かす興味があり、また目標・目的を持って遊びだす。子どもが我慢を体験する仕組みとして、すでに遊びの中に抑制機能が働く仕組みが備わっているのである。自発的に遊び始めたことから「不思議だなー」「きれいだなー」等と感動する中で、「なぜ」と考えたり「もしかして」と思考を繰り返し、意欲的になっていく。遊び続けたい思いから、やる気が起こり粘り強さが培われていく。遊び続けたいからうまくいかないとき、友達と話し合い、問題を見つけ、時には葛藤したり、折り合いをつけたりし主体的にかかわっていくことで自信につながっていく。点数にはしにくい非認知能力である。

幼児期の子どもを育てるためにどれだけ遊ぶことそのものが大切であるかを理解し、まだ自ら抑制できない子どもの遊びを真摯に支えてくれている保育者に感謝をしつつ、「今」しかできない経験を家庭でも園でも大切にしてほしいと願っている。

